The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	明石の尼君は歌を詠んだか ： 『源氏物語』（若菜下巻）住吉詣の和歌二首再考
Author(s)	小林, 理正
Citation	語文. 2024, 122, p. 12-23
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/98207
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

明石の尼君は歌を詠んだか

――『源氏物語』（若菜下巻）住吉詣の和歌二首再考――

小林理正

はじめに

さまざまに読み解かれ、そして読み継がれた『源氏物語』には無数の注釈がこれまでに施されてきた。そうした享受の在り方は現在も続いている。しかしながら、それでも充分な理解あるいは解釈がいまだ得られていない本文および表現もある、というのが『源氏物語』研究の実情だ。

若菜下巻に見られる和歌「住の江をいけるかひある渚とは年経るあまも今日や知るらん」（以下、「住の江を……」歌）と、「昔こそまづ忘られね住吉の神のしるしを見るにつけても」（以下、「昔こそ……」歌）の二首は、明石の尼君が詠じた歌と理解されている（『新編日本古典文学全集』④・一七三頁）[1]。けれども、当該歌の詠じられた場面状況および当該二首のことばを尼君と結びつけ、物語を読み解いていくとき、通行する解釈とは異なる詠者理解の可能性があるように思われる。――尼君は歌を詠んでいなかったのではあるまいか。

こうした問題意識のもと、本稿では上述二首の再検討をつうじて、その詠者理解の再考を試みる。

一　問題の所在

当該二首の詠じられた場面を『新全集』に拠って掲げ、その叙述を大掴みながらも確認しておく。なお本文は、私に［Ⅰ］～［Ⅶ］の塊に分ける。

○　若菜下巻・『新全集』④・一七二～一七三頁

［Ⅰ］大殿、昔のこと思し出でられ、中ごろ沈みたまひし世のありさまも、目の前のやうに思さるるに、その世のこと、うち乱れ語りたまふべき人もなければ、致仕の大臣をぞ恋しく思ひきこえたまひける。［Ⅱ］入りたまひて、二の車にしのびて、

たれかまた心を知りて住吉の神世を経たる松にこと問ふ御畳紙に書きたまへり。［Ⅲ］尼君うちしほたる。［Ⅳ］か

かる世を見るにつけても、かの浦にて、今はと別れたまひしほど、女御の君のおはせしありさまなど思ひ出づるも、いとかたじけなかりける身の宿世のほどを思ふ。[Ⅴ]世を背きたまひし人も恋しく、さまざまにもの悲しきを、[Ⅵ]かつはゆゆしと言忌して、

住の江をいけるかひある渚とは年経るあまも今日や知るらん

おそくは便なからむと、ただうち思ひけるままなりけり。

[Ⅶ]昔こそまづ忘られね住吉の神のしるしを見るにつけても

と独りごちけり。

[Ⅰ]過往のことが思い出される源氏は、須磨流謫の日々も目の前の出来事のように思われるが、その当時のことを気兼ねなく話し合えそうな人もいないので、致仕の大臣のことを恋しく思う。そうした中、[Ⅱ]源氏は明石の君と尼君、明石の女御の乳母が乗る二の車に人目を避けて「たれかまた……」という歌を畳紙に書いて寄越す。[Ⅲ]尼君は涙で袖を濡らす。[Ⅳ]かの（明石ノ）浦で、もはやこれまでと源氏と別れたときのこと、女御の君（明石ノ姫君）がいた様子などを思い出すのも、畏れ多い我が身の宿世のほどを思う。[Ⅴ]俗世を捨てた人（明石ノ入道）のことも恋しく、さまざまな事物につけて悲しく思われるけれど、[Ⅵ]一方では（盛儀ニハ）縁起でもないと言葉を慎んで、尼君は「住の江を……」という歌を（返歌ガ）遅くては都合が悪かろうと、ただ心に思ったままを詠むのであった。そののち、[Ⅶ]「昔こそ……」と尼君は独り呟いた。

源氏贈歌へ尼君が「住の江を……」と返歌し、そののち「昔こそ……」と「独りごち」た。これが通行する当該二首の詠者理解となっている。[2] しかし、如上の解釈を支持する場合、以下に掲げる三つの疑問を解消する必要があるのではないか。

第一、第二の疑問は、返歌「住の江を……」に関連する。若菜下巻以前、源氏と尼君の間で和歌の贈答があったことは一度もない。たとえば松風巻には尼君が姫君の行末を思い、さまざまに源氏へ申しあげる場面がある。そこでは尼君と源氏による和歌のやり取りが語られている。[3] ただし、「いひ消つ」ように尼君が歌を詠んだのに源氏が歌で応えた点には注意を要する。形式上、尼君と源氏の間で和歌贈答が成立しているが、源氏から尼君へ歌を詠んだわけではない。「住の江を……」歌を尼君の返歌と読み解く場合、若菜下巻以前、源氏から尼君へ歌を贈ることのない『源氏物語』の語り方との相違を説明しうるだけの解釈論理が必要となる。

また、「住の江を……」歌の下句「年経るあまも今日や知るらん」の解釈にも問題が隠されている。ここの「あま」は［蜑――尼］の掛詞で、住吉に住まう蜑と明石の尼君を表わす歌ことばである。下句に［や～らん］とあることから、「あま」の心中を詠者が推し量っていると知られよう。従来説に拠ると、尼君が自分自身のいまの胸中を推量したと読み解かねばならない。そうした詠者（または詠歌主体）が自分自身の現在を推量する詠み方は稀な

ケースと知られている。[4] 類例僅かな事例の一つに「住の江を……」歌を認定する、これが通行する理解の当該歌把握となっている。表現史上、あまりないケースの一例として当該歌を想定せねばならない具体的な論理を本文解釈に基づき、説明する現代注はない。尼君でない他者が「あま」の胸の内を推し量った、こういった「や～らん」の表現史上、無理のない理解の検証・吟味がなされてこなかったのは問題があろう。

第三の疑問は、「昔こそ……」歌の解釈にまつわる。従来説にしたがって当該歌を読み解くと、尼君は「住吉の神のしるし」を頼りにしていた、あるいはそれに縋っていたとの理解が得られる。しかしながら若菜下巻、それも住吉詣に及んで、尼君が突如として信仰篤くなり、「住吉の神のしるしを見る」ようになったと解しなければ、如上の理解を支持することはできない。『源氏物語』という物語の中で、尼君がどのように造型され、位置づけられ、「住吉の神」と向き合ってきたかを精査したうえで「住吉の神のしるしを見る」のか、あるいは「見」ないのか、この問いが明らかにされないうちに、その詠者が誰であるかを云々するのは早計だろう。

「住の江を……」歌と「昔こそ……」歌は尼君の詠歌とされてきた。しかし確認したとおり、その理解には不審な点がいくつかある。それゆえに本稿では、この三つの疑問の精査をつうじて「住の江を……」歌と「昔こそ……」歌の詠者理解を再検証していく。

二　「二の車にしのびて」歌を贈る源氏

ここでは源氏の「たれかまた……」という贈歌の再検証をつうじて、当該歌の対象を明らかにしていく。この検討から浮かびあがるのは、返歌、すなわち「住の江を……」歌の詠者が誰かを考えるさいの手がかりとなる場面理解である。

「たれかまた……」歌は「二の車にしのびて」贈られていた。その車中には、明石の君と尼君、明石の女御の乳母の三人がいた。従来、尼君宛のものと読み解かれてきた源氏贈歌だが、尼君へ歌を寄越していたとするのなら、どうして「尼君にしのびて」や、「しのびて、尼君に」のような本文が確認されないのだろう。[5] 尼君宛と解すのが自明であるがゆえ、そうした本文状況である可能性も想定されようが、その一方で尼君へ贈られたものではないことに起因する本文状況である可能性も同様に考えられる。しかし、源氏贈歌は「二の車に」贈られていたことから察するに、当該歌は尼君宛、すなわち尼君のみを対象としたものではなく、「二の車」に乗り合わせる明石一族（明石の君・尼君）とその関係者（女御の乳母）へ向けて贈られていたと判断するのが本文理解としては自然であろう。だからこそ、諸本は「二の車にしのびて」で異読を許さぬ本文状況にある。このように整理できる以上、源氏贈歌「たれかまた……」は尼君へ贈られたものではないと考えられる。

当該歌の解釈も確認しておく必要がある。尼君宛の贈歌と理解する点、諸注、その理解に揺れはない。けれども、その解釈には

次に示すようなヴァリエーションが認められる。

○『新釋』④・一八頁

昔の事情を知つてゐて住吉の神代以來の松（あなた）に話しかける人は、私以外にはない筈です。

○『全書』④・一三四頁

神代以來の住吉の松にあなたと私以外の誰が昔を知つて話掛けるでせうか。

○『大系』③・三三三頁

私達の外に又、誰が昔の事情（祈願をかけた事など）を知っていて、神代から久しい年月を経ている、住吉の松に、あの当時の事を尋ねる（話しかける）か、尋ねる者はない。（この神に昔、祈願をかけた事を知っているのは、私達二人だけである。）

○『全集』④・一六四頁

あなたとわたし以外には、誰が昔のことを知っていて、住吉の社頭の、神代以来の年経る松に話しかけるであろう

○『玉上評釈』⑦・三〇五頁

貴方と私以外の誰が昔の事を知っていて、住吉の神代以来の松に話しかけましょうか

○『集成』⑤・一五七頁

私のほかに誰が、昔からのいきさつを知っていて年老いたあなたに話しかけるでしょうか。

○『新大系』③・三二五頁

私たち以外の誰が事情を知っていて住吉の神代以来の年を経た松に話しかけようか。

○『新全集』④・一七二頁

あなたとわたしのほかには、誰が昔の事情を知っていて、住吉の社頭の、神世以来久しく年を経た松に話しかけることができようか

○『鑑賞と基礎知識』・九二頁

私たち以外の誰が事情を知っていて、この住吉の神代以来の年を経ている松に話しかけることがありましょうか。

○『正訳』⑥・一九六頁

あなた方とわたし以外に誰が昔のことを知っていて、住吉の神代以来の年月を松に語りかけるのでしょうか。

○『岩波文庫』⑤・四一七頁

私たち以外のだれが（今日の参詣の）事情を知っていて住吉の神代以来の年を経た松に話しかけようか。

『新釋』と『集成』は、源氏だけが尼君に訊ねられると解釈する。『全書』『玉上評釈』『全集』『新全集』は、源氏と「あなた」の二人が住吉の松に話しかけられると読み解く。ここの「あなた」は尼君と解釈されている。『大系』は、「私達二人」が松に話しかけられるとするが、この二人が源氏と誰をいうのか明示しない。ただし、尼君が返歌したとの解釈を支持することから、「私達二人」は源氏と尼君の二名を想定するか。『新大系』『鑑賞と基礎知識』『正訳』『岩波文庫』は、源氏と明石一族およびその関係者だけが

松に語りかけられると読解している。以上、三パタンの見解のあることが知られる。「たれかまた……」歌は尼君のみを対象としていなかったことは既に述べたとおりであるから、『新大系』『鑑賞と基礎知識』『正訳』『岩波文庫』の提示する解釈、すなわち源氏と明石一族およびその関係者が住吉の「神世を経たる松」に「こと問ふ」ことができるというのが、当該歌の正しい読み方といえる。

問題は、「神世を経たる松」をどのように読み解くかである。現在、A尼君の譬喩と解するもの、B住吉の松と解釈するもの、以上二パタンの見解がある。「松」が明石一族の女の喩えになる例は『源氏物語』の中にいくつか見出すことができる[6]。したがって、ここもその一例と考えることは充分に可能だ。その場合、「神世を経たる松」は幾星霜の歳月を経た松、すなわち尼君を表わしていることになる。「ややもすれば、たへぬよろこびの涙、ともすれば落ちつつ、目をさへ拭ひただ」（④・一六七頁）す尼君であったから、自分自身のことを詠み込んだ歌が源氏から届けられたことで、彼女は感涙ゆえに「うちしほたる」。この場面理解は、叙述との間に問題を残さない。その一方で、字面どおりに読み解く場合、「神世を経たる松」に「こと問ふ」とある歌を承け、なぜ、尼君が涙で袖を濡らすのか、充分に説明できない。それゆえに「神世を経たる松」は、尼君の隠喩であると考えられる。

ここまでに得た見解を押えつつ、源氏贈歌をめぐる場面理解を整理すると、以下のようになる。

若菜下巻・住吉詣の場面以前、源氏から和歌を贈られたことが一度もなかった尼君。しかし、ここで初めて源氏から「たれかまた……」という歌が「二の車」へもたらされた（ただし実際には、当該歌は「二の車」へ寄越されたのであって、尼君宛に贈られたものではない）。その歌には「神世を経たる松にこと問ふ」とある。耄碌尼君は、自分のことを詠み込んだ歌に感激し、「うちしほたる」のであった。この場面状況にあっては、尼君が返歌したとも、彼女以外の者が「住の江を……」と詠んだとも解しうる。

この場面を、源氏贈歌に尼君が返歌したとのみ読み解くのは、もう一つある解釈の可能性を無根拠に棄却することにほかならない。

三　「らん」の用法と、「住の江を……」歌の解釈

「二の車」に乗り合わせる明石一族およびその関係者へ「たれかまた……」歌が贈られていたことは前節で述べたとおりである。本節では、源氏贈歌への返歌、すなわち「住の江を……」歌を取りあげ、その表現上の不審、「や～らん」をめぐる疑問に着目し、当該歌の再検証を行う。

たとえば室町時代中期成立と目される、日下部忠説『尋流抄[7]』には、以下のような指摘が「住の江を」歌になされている。文意の取りやすいよう、私に句読を切る、清濁を区別するなどして本文を掲げるが、表記はそのままとした。

○『尋流抄』・三六〇頁

此哥（「住の江を」歌・稿者注）を古注共に尼君の哥と注す。是は明石上の哥とぞ覚る。哥の下句もあまの上をおもひやりたる哥也。前にあま君打しほたれたりと云に付て、尼君の哥と云歟。かゝる世をみるに付てもあるより明石上の心なしをいふとぞ覚侍る。心をつけて可分別事也。明石上をさしをきて尼君の御返哥申さんも如何とぞ覚る。

『尋流抄』以前、当該歌を尼君詠とする解釈があったこと、そうした見解とは異なる理解を忠説が得ていたこと、この二点が知られる。ここでは「哥の下句」、つまり「年経るあまも今日や知るらん」を「あまの上をおもひやりたる」ものと解釈する点に注目したい。これに拠ると〝年取る蜑も今日知るように、年老いた尼も今日知ることになるのでしょうか〟と読み解ける。従来説は、自分自身をも含む「あま」のことを尼君本人が「年経るあまも今日や知るらん」と推量して詠んだとしてきた。だが、［や～らん］とあるのを思うと、「あま」の心中を尼君でない或人物Xが推量して詠んでいたと考える方が自然な読み方であるように思われる。

たとえば明石巻、源氏が「をちこちも知らぬ雲居にながめわびかすめし宿の梢をぞとふ」（②・二四八頁）という歌を明石の君へ贈る場面がある。源氏へなかなか返事しない明石の君に、業を煮やした明石の入道は「ながむらんおなじ雲居をながむるは思ひも同じ思ひなるらむ」（②・二四九頁）と代わりに詠んで源氏へ返事した。この歌には「「思ひも同じ思ひなるらむ」と推量形を用い、娘の立場でなく、娘の気持ちを推し量った形になっている」（圏点は稿者）という久保木哲夫[8]の指摘がある。注目されるのは、「らむ」とあるために形式上、詠者が他者Aの胸中を推量した歌であることが知られるという点である。「住の江を……」歌は「年経るあまも今日や知るらん」とあった。尼君の胸中を或人物Xが推量して詠まれているからこそ「らん」という目印がある、と考えることは充分に可能だ。

或人物Xは誰か。源氏贈歌は「二の車」に贈られていた。その車内には尼君のほかに明石の君と女御の乳母が乗り合わせている。そのため、或人物Xとなり得るのは、明石の君と女御の乳母の二者である。乳母が尼君の心中を推し量って、源氏へ「年経るあまも」と詠み込んで返歌するとは考えづらい。そもそも乳母が、明石の君や尼君に代わって源氏に返答する必然性が、この場面にはない。したがって、乳母を或人物Xに想定することはできない。その一方で、明石の君が年老いた母・尼君の心中を推量して返歌を詠んだという読み方には無理がない。尼君は「うちしほたる」有様であったから返歌できそうにもない[9]。このように考えた明石の君は「住の江を……」、〝この住の江を生きがいある汀だと年取る蜑も今日知るように、母・尼も今日知ることになるのでしょうか〟と母の胸中を推量しつつ、思ったままを返歌した。このような場面理解を得ることのできる明石の君を詠者とする解釈は、［や～らん］の表現史との間に問題を抱え込まない。――「住の江を……」歌は、尼君の心中を推し量った明石の君による源氏贈歌

への返歌である。

ちなみに若菜上巻、尼君が「老の波かひある浦に立ちいでてしほたるるあまを誰かとがめむ」（④・一〇七頁）と詠んでいたことを承け、「住の江をいけるかひある渚」と詠う「住の江を……」歌の詠者を尼君とする立場もあろう。けれども、もし尼君が「生けるかひある渚」だと「住の江を」知ると詠んだとするならば、その歌句は「年経るあまは今日ぞ知りぬる」のようにあって欲しい。しかし、そうした本文は『源氏物語』諸本に確認できない。特徴的な言葉が或人物と関わる表現法は、作り物語にまま見受けられ、『源氏物語』にも認められる。しかしそのことが「住の江を……」歌の「らん」にまつわる表現上の不審を解消することはない。そもそも「老の波」歌が詠じられた場には、明石の君も同座していた。それゆえに明石の君が「かひある」をあえて用い、尼君の胸の内を推し量った歌を詠じたという読み方は、たとえ「かひある」が尼君と密接に結び付く語句であったとしても可能なのである。「かひある」とあることをもって「住の江を……」歌の詠者を尼君と断じるべきでない。

四　「住吉の神のしるしを見る」のは誰か

本節では「住の江を……」と詠まれたのち、「独りご」たれた「昔こそ……」という歌の再検証をつうじて、その詠者が誰かを精査していく。

当該歌をめぐる言説の中で、以下に掲げる鈴木日出男[10]の見解は、その発表後、広く受け入れられ、平成以降の諸注に全面的に採られている。鈴木は「源氏との共感だけでは収まりえない、明石側からの固有の発想が、尼君ひとりの胸中に反芻されている」（八九九頁）と述べ、「尼君の老耄ぶりを世間にさらすべきでないとして、尼君の参詣への参加にさえ（明石ノ君ハ）賛成しなかった」（九〇〇頁）ことを踏まえ、「昔こそ……」歌を明石の君詠と判断せず、尼君が詠じたと解釈する。さらに「むしろ明石の君の、和歌に関わらぬ態度こそ一つの主張である」（九〇〇頁）と言い、明石の君が歌を詠まない点にこそ意味があると指摘し、当該歌の詠じられた場面を理解していく。しかし如上の見解は、人物造型を手がかりとするばかりで「昔こそ……」歌の読解から帰納されたものではない。

こうした読み方を認めるのであれば、次のような理解もまた可能と言わざるを得ない。「昔こそ……」という歌が「独りごち」に詠じられたのは、日陰の身である明石の君の立場をよく表わしている。なればこそ、「昔こそ」歌は明石の君が詠じた、と。

右の私解と鈴木説は、どちらも人物造型に基づく点で同様のレベルにある。それだけに両見解は、互いに妥協点を見出すことができない。「昔こそ……」歌の詠者が誰か、明らかにするうえで必要なのは、当該歌のことばと人物造型、その双方の分析である。如上の問題意識のもと、「住吉の神のしるしを見る」のが誰かという点に注目し、当該歌の詠者を再検証する。

明石一族は住吉の神に祈りを捧げてきた。このことは作中幾度

も語られているから、よく知られている。しかしながら、ここでいう「明石一族」が誰を含めいうのか、確認しておかねば、「昔こそ……」歌の詠者理解を正確に得ることはできない。そこで以下、明石一族と「住吉の神」の「しるし」について語られる場面を掲げ、この疑問について精査していく。

まずは須磨巻の事例を取りあげ、誰が住吉の神の霊験を頼りにしていたか確認する。

○　須磨巻・②・二一一～二一二頁

このむすめすぐれたる容貌ならねど、なつかしうあてはかに、心ばせあるさまなどぞ、げにやむごとなき人に劣るまじかりける。身のありさまを、口惜しきものに思ひ知りて、高き人は我を何の数にも思さじ、ほどにつけたる世をばさらに見じ、命長くて、思ふ人々におくれなば、尼にもなりなむ、海の底にも入りなむなどぞ思ひける。父君、ところせく思ひかしづきて、年に二たび住吉に詣でさせけり。神の御しるしをぞ、人知れず頼み思ひける。

明石の君は「高き人は、……海の底にも入りなむ」などと思っている。その一方で父・入道は、年に二度、住吉参詣を行い、「神の御しるしをぞ、人知れず頼」んでいた。入道は、明石の君に「ところせく思ひかしづきて」「年に二たび住吉に詣でさせけり」とあったから、「神の御しるし」を頼りとするのは入道・明石の君父娘と知られる。尼君が、年二度の住吉詣に同行した旨は、一切語られていない。

次は、澪標巻で行われた住吉詣の場面をみてみる。秋、源氏は願ほどきのため、住吉へと赴く。ちょうどその折、明石の君も住吉へやってきた。以下に掲げるのは、そうした場面の一節である。

○　澪標巻・②・三〇二頁

をりしもかの明石の人、年ごとの例の事にて詣づるを、去年今年はさはることありて怠りけるかしこまりとり重ねて思ひ立ちけり。舟にて詣でたり。

源氏の盛儀を目の当たりにした明石の君は、日取りを改め、後日、住吉へ詣でる。この場面で明石の君は「ほどにつけたる願どもなどかつがつはたし」（②・三〇八頁）、「またなかなかもの思ひ添はりて、明け暮れ口惜しき身を思ひ嘆く」（同）。そうこうしているうちに、源氏のもとから使者が来て、近く京へ迎える旨を伝えてきた。その連絡を承け、明石の君は更に思い悩み、「よろづにつつましう、思ひ立ちがたき」（同）旨を返答した。このようなことが澪標巻で語られている。「かの明石の人々」とないこと、「例の事にて詣づる」とあることからも知られるが、ここに尼君の姿を見出すことはできない。

次例は、藤裏葉巻のものである。姫君の入内に伴い、明石の君はその後見となる。いよいよ姫君入内の段となって明石の君の胸中は万感交到り、涙が止まらない。次に示すのは、そのような場面の一幕である。

○　藤裏葉巻・③・四五一～四五二頁

いとうつくしげに雛のやうなる御ありさまを、夢の心地して

見たてまつるにも、涙のみとどまらぬは、ひとつものとぞ見えざりける。年ごろよろづに嘆き沈み、さまざまうき身と思ひ屈しつる命も延べまほしう、はればれしきにつけて、まことに住吉の神もおろかならず思ひ知らる。

このような場面で、明石の君は「住吉の神もおろかならず思ひ知らる」。自発の「る」が用いられていることからも分かるとおり、明石の君は「住吉の神」の霊験を自然と自覚している。その一方、尼君がどのように感じたのかは、ここでは語られていない。[11]

ここまで若菜下巻以前、住吉の神を頼りとしていた明石一族の者が誰であるか、見てきた。明石一族の中でも、入道と明石の君は年二度の住吉詣を行い、「住吉の神」の霊験に縋ってきたことが再確認できた。この神の「しるし」を明石の君が「思ひ知らる」とあった点は押えておきたい。こうした位置づけがなされる明石の君と違って、尼君が「住吉の神のしるしを見」た、あるいは思い知ったということは、若菜下巻以前、一度も『源氏物語』で語られない。尼君は「さるべきにて、もとよりかくにほひたまふ御身どもよりも、いみじかりける契りあらはに思ひ知らるる人の御ありさま」（④・一七〇頁）であったと語られこそすれ、これとても「住吉の神のしるし」ゆえのものではない。

「住吉の神のしるしを見るにつけても」、これまでのことが「まづ忘られね」と詠むのは、住吉の神の霊験を自覚する明石の君にのみ可能なことであった。

五　おわりに

若菜下巻・住吉詣の場面で詠われる「住の江を……」歌と「昔こそ……」歌の詠者が誰か、その再検証をここまで試みてきた。その結果、前者は明石の君が母・尼君の胸中を推量した歌で、後者は明石の君の独詠歌であるとの見解を得るに至った。若菜下巻・住吉詣において尼君は歌を詠んでなどいなかったわけだ。

明石の君および尼君について論じるさい、若菜下巻・住吉詣の一幕は取りあげられることがままある。尼君が歌を詠み、明石の君は歌を詠まないという通行する見解に立脚する論考もある。若菜下巻では、明石の君が歌を詠み、尼君は歌を詠まない、という詠者理解に拠る内容分析がなされることを期待したい。

ちなみに『源氏物語』注釈史・享受史上、「住の江を……」歌を尼君詠とする理解が存在していたと予測される。その見解が或程度流布していたからこそ、『尋流抄』のごとき指摘も生じたと考えられる。ただし、『尋流抄』の見解は享受史上、広く受け入れられなかったようである。それゆえに古注釈書の中でさえ、明石の君説を取りあげるものがほとんどないのであろう。

これに対して「昔こそ……」歌の詠者理解は早くから揺れていたことが諸資料からも明らかである。たとえば諸注が底本とする明融本や大島本は「昔こそ……」歌に明石の君を詠者とする注記をつけている。その一方で、国冬本若菜下巻（室町時代補写）は

両首ともに尼君詠とする注記を有している。[12] その詠者注記が、いつのものであるかは分からないが、「昔こそ……」歌の詠者理解が享受史上揺れていたことは間違いない。

また、作り物語の作中歌を集めた歌集『風葉和歌集』[13]に当該歌は採られている。同集では尼君が詠者と認定されている。

○『風葉和歌集』（丹鶴叢書本）・巻七・神祇・四七一

六条院すみよしにまうでさせ給ひけるに、しのびてまゐりてよめる　源じのあかしのあま

むかしこそまづわすられね住よしの神のしるしをみるにつけても

『風葉集』は「ふみながしといふとしのやとせ」、つまり文永八年に成立したことが序文より知られる。少なくとも鎌倉時代中期以前に「昔こそ……」歌を尼君詠とする理解のあったことが同集より分かる。時が下ると、たとえば藤原正存『一葉抄』の「是ハ尼公の哥也。明石上の哥にやと云儀（マヽ）もあれど、「ひとりごちける」といへる詞つゞき、尼公の哥うたがひなし」（三一三頁）[14]のような注解も現われてくる。「明石上の哥にやと云儀もあれど」とあることから、「昔こそ……」歌を明石の君詠とする理解が室町時代にあったと分かる。ただし、この二パタンの詠者理解をどちらか一方に決するのは至難の業であったらしい。このことは、たとえば江戸時代の古注釈書・北村季吟『湖月抄』が先行注を引用するほかに「尼君明石両説」（一八丁オ）との注記を「昔こそ……」歌に付けていることから窺い知ることができる。[15]

さまざまに読まれ、注解が施され、見解が蓄積されていったことで「昔こそ……」歌の詠者理解は、右のようなヴァリエーションを江戸時代になってもなお保持するに至ったと推察される。しかし、そういった振り幅のある読み方は、近代以降、詠者理解が尼君説に収束、固定されてしまったがゆえ、その流動性を喪ってしまったのであった。

注

（1）本稿における『源氏物語』本文の引用は、特記しないかぎり、阿部秋生・秋山虔ほか『新編日本古典文学全集』（小学館）に拠る。引用のさい、巻数を丸数字で表示し、それに続けて該当頁を記した。

（2）本稿で参照した注釈書は、いずれも二首ともに尼君が詠じたと解釈している。以下、本稿での略称に続けて、諸注の書誌情報を掲げる。なお引用のさい、その巻数は丸数字で示した。

『新釋』――吉澤義則『新釋源氏物語新釋』第四巻（平凡社、昭和一三年）。『全書』――池田亀鑑『日本古典全書　源氏物語』第四巻（朝日新聞社、昭和五一年・第二一版）。『大系』――山岸徳平『日本古典文学大系　源氏物語』第三巻（岩波書店、昭和四七年・第一三刷）。『玉上評釈』――玉上琢彌『源氏物語評釈』第七巻（角川書店、昭和五四年・第八版）。『全集』――阿部秋生、秋山虔ほか『日本古典文学全集　源氏物語』第四巻（小学館、昭和五三年・第五版）。『集成』――石田穣二・清水好子『新潮日本古典集成　源氏物語』第五巻（新潮社、昭和五五年）。『新大系』――柳井滋・室伏信助ほか『新日本古典文学大系　源氏物語』第三巻（岩波書店、平成七年）。『新全集』――阿部秋生・秋山虔ほか『新編日本古典文学全集』第四巻（小学館、平成八年）。『鑑賞と基礎知識』――鈴木一雄

監修・宮崎荘平編『源氏物語の鑑賞と基礎知識』若菜下巻（前半）（「国文学「解釈と鑑賞」別冊」至文堂、平成一六年）。『正訳』――中野幸一『正訳　源氏物語本文対照』第六巻（勉誠出版、平成二八年）。『岩波文庫』――柳井滋・室伏信助ほか『岩波文庫　源氏物語』第五巻（岩波書店。平成三一年）。

（3）松風巻の一幕は、次のとおり。

○『新全集』②・四一三頁

（前略）昔物語に、親王の住みたまひけるありさまなど語らせたまふに、繕はれたる水の音なひかごとがましう聞こゆ。

住みなれし人はかへりてたどれども清水は宿のあるじ顔なる

わざとはなくて言ひ消つさま、みやびかによしと聞きたまふ。「いさらゐははやくのことも忘れじをもとのあるじや面がはりせる

あはれ」と、うちながめて立ちたまふ姿にほひを世に知らずとのみ思ひきこゆ。

（4）たとえば小田勝『実例詳解古典文法総覧』（和泉書院、平成二七年）では、問題の「らん」の用法について「自分の現在の事態を「らむ」で推量することは稀である」（一九九頁）と説明する。

（5）池田亀鑑編『源氏物語大成』（中央公論社）、加藤洋介『河内本源氏物語校異集成』（和泉書院）、同「定家本（別本）源氏物語校異集成（稿）」（http://www2.kansai-u.ac.jp/ok_matsu/）などを確認しても尼君へ贈ったことが明示される本文は見当たらない。なお本稿で異文に言及するさいは、いずれの場合も上掲資料を参照している。

（6）「松」が、明石一族の女の譬喩となる例は『源氏物語』の中にいくつかある。たとえば明石の姫君との別れの場面（薄雲巻）で、明石の君と源氏が和歌をやり取りする。そこで明石の君は「末遠き二葉の松にひきわかれいつか木高きかげを見るべき」（②・四三四頁）と詠い、これに源氏が「生ひそめし根もふかければ武隈の松に小松の千代をならべん」（同）と返歌している。「二葉の松」と「小松」は姫君を、「武隈の松」は源氏・明石の君をそれぞれ喩えている。

（7）本文の引用は、井爪康之編『源氏物語古注釈書　尋流抄』（笠間書院、平成一二年）に拠る。

（8）久保木哲夫「代作歌」（同『折の文学　平安和歌文学論』笠間書院、平成一九年。初出は平成一五年）一六六頁。

（9）たとえば葵巻、葵上死後、源氏の寄越してきた文を見る大宮は「目も見えたまはず沈み入りて、御返も聞こえたまは」（②・六二頁）ない。これを〝涙のために返事できない〟表現例と見ると、明石の尼君が感涙ゆえに返歌できない状態にあったと読み解くことも一応できる。

（10）鈴木日出男「『源氏物語』の和歌」（同『古代和歌史論』東京大学出版会、平成二年。初出は昭和五五年）。

（11）「思ひ知らる」には「おもひしる」「おもひしを」という異同のあることが確認されている。しかしながら、この違いから「住吉の神のしるし」を尼君が実感する物語を読み取ることはできない。

（12）なお、両首ともに明石の君を詠者とする注記を備える伝本を稿者はいまだ見出せずにいる。存じあげる方がおられましたら、なにとぞご教示くださいますよう伏してお願い申しあげます。

（13）本文の引用は、『新編国歌大観』（古典ライブラリー）に拠る。なお諸本、尼君を詠者とする点で一致していること、中野荘次・藤井隆編『増訂　校本風葉和歌集』（友山文庫、昭和四五年）に拠って確認している。

（14）本文の引用は、『源氏物語古注集成』第九巻（桜楓社）に拠る。なお、私に清濁を区別したり、句読を切ったり、鉤括弧などの記号を付けたりするなどの措置を施したうえで本文を掲げた。

（15）法政大学図書館蔵『湖月抄』（F2c/29/34b）に拠る。

※　本稿で言及した『源氏物語』諸本の書誌情報を掲げる。
明融本――東海大学桃園文庫影印刊行委員会編『源氏物語（明融本）Ⅱ』東海大学蔵　桃園文庫影印叢書　第二巻（東海大学出版会、平成二年）
大島本――古代學協会・古代學研究所編『大島本源氏物語』第六巻（角川書店、平成八年）。
国冬本――天理大学附属天理図書館のデジタル画像（閲覧）。

附記
本稿は、ＪＳＰＳ科研費（23KJ1989）の助成を受けた研究成果の一部である。

（こばやし・ただまさ　北海道大学講師）